

# 門司港名所散歩

## <sup>へさき</sup> \* 部先の灯台(清虚像)



九州最北端のこの岬は、その昔「念仏岬」とも呼ばれた航海の難所でした。

天保7年(1838年)高野山へあがる為、豊後国(大分県)から下関経由の船に乗り合わせた旅僧清虚は、船客が数珠を手に念仏を唱える様をみて、この難所から一人でも多くの人命を救わんと、燈明台を建て、目印の明かりを炊きつづけることを決心し、この地に上陸しました。

以来13年間、74歳で没するまで、日中托鉢でえた糧を焚料にし、一日一食で暮らしつつ、山の中腹で、雨の日も風の日も読経とともに燈明の火を絶やさずに炊きつづけました。

人々は、はじめ彼を一食坊主・乞食坊主とさげすみましたが、いつしか彼に協力するようになりました。彼の没後、その燈明は麓青浜の村人「利三郎」によって受け継がれ、11年後さらに庄屋が受け継ぎ、明治5年に洋式灯台が建設されるまで、燈明は炊かれつづけました。

部先の灯台は、その設備費用が、有名な元治元年(1864)の英米佛蘭四カ国 vs 長州藩の馬関戦争で、日本が支払うことになった賠償金の利息の一部でまかなわれ、設計は明治政府の招きで来日した英国人アール・ヘンリブラントン技師によるもので、全国で15番目に建設された古い洋式灯台です。

写真は、昭和47年に有志により灯台下の海岸に建設された清虚の立像です